

Title	敦煌所見韻文写本の書写形態を通して見た唐五代の一文藝状況
Sub Title	The form on Dun-huang poetry manuscript
Author	渋谷, 誉一郎(Shibuya, Yoichiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1994
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.65, (1994. 3) ,p.331- 354
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	檜谷昭彦, 佐藤一郎両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00650001-0331">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00650001-0331</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 敦煌所見韻文写本の書写形態を通して見た唐五代の一文藝状況

渋谷 誉一郎

はじめに

いわゆる敦煌出土唐・五代写本には、詩詞、俗曲をはじめとして、変文に代表される講唱文学、釈道經典等に含まれる偈頌、讚文、陀羅尼、真言、呪文など、中国古典韻文のあらゆる形態が見られると言っても過言ではない。これらの韻文がどのくらいの数量になるのかは未だ明確になっていない。文学韻文を最も多く収める任二北『敦煌歌辞総編』(以下『歌辞総編』と略称<sup>1)</sup>)には一三〇〇余种を数えるが、講唱文学および大多数を占める宗教文献に含まれる韻文を加えると数千から万を下らないと思われる。その全貌が姿を現すにはいましばらく時間を要するであろう。本稿は、敦煌韻文写本の基礎研究の一環として、文学文献を中心に書写形態の初歩的調査および若干の分析結果を報告するものである。

敦煌写本に現れる韻文を鳥瞰すると、その書写形態において、分段と不分段の相違が顕著である。分段とは、一段ごとに句を分けて記す形式である。図版2（図版は末尾に付してある。以下同）は七言二段、図版4は中央にやや見にくいかもしいれないが五言句が、左側には七言句が見えるが、いずれも二段ないしは三段に、きれいに段を分けて書写されているのが認められる。不分段というのは、白文、ベタといわれる形式である。図版1はいわゆる〔唐人選唐詩〕で、韻文の形式では齊言体、雜言体ともに録されている。詩題、作者名は段を分けて記されているが、本文についてはいずれもまったく分段しない、白文で書写されているのがわかる。本稿は、この分段と不分段の相違に着目した調査報告である。

まず、全体について凡例を示す。

(1) 調査対象は、スタイン、ペリオ蒐集敦煌出土文献に現れた韻文である。写本中に韻文が含まれていても、未確認あるいは欠損等によって作品の見出せないものは省いた。

(2) 調査対象となる韻文を、内容と形式に基づいて以下の項目に分類した。

I、詩文類（含齊言体、雜言体、齊雜混淆体）

II、俗曲類

(甲) 宗教類

(乙) 世俗類

各々について、(イ) 齊言体、(ロ) 雑言体

### III、講唱類

(甲) 講經文類

(乙) 変文類

(丙) 押座文類

(丁) その他

### IV、詩讀(經典)類

(甲) 仏教類

(乙) 道教類

(3) 作品名について、『』は真題、( ) は擬題を示す。「文選」等、通行している書名については通行題を用いた。俗曲について、「」は曲牌、「」は『歌辞総編』による比定曲名を示す。

(4) 題目の後の点数は、調査対象写本の数を示す。表示のないものは該当写本一点のみのものである。同一作品名で異同の認められる複数の写本の存するもの、および俗曲類は零細な写本が多いので一篇ごとに所収編号を付した。編号の頭のSはスタイン、Pはペリオを示す。

(5) 図版には所収編号および該当部分について、若干コメントを加えた。Rは紙表、Vは紙背、その後の数字は記載順位を示す。

Ⅰ 詩文類。内容による分類で、漢民族の伝統的正統文学と称されるものである。形式的には、古体、近体、樂府等が含まれる。換言すれば、齊言体、雜言体といった様々な形式を網羅するが、ここでは形式面からの類別を設けていない。それは齊言体、雜言体ともに、ひとしく不分段の傾向を示しているからである。

①分段、なし。

②不分段

「毛詩」(毛詩故訓伝、一〇点)、「毛詩」(毛詩定本、三点)、「文選」(二五点)、「玉台新詠」、「珠詠集」(珠詠學士集、二点)、「唐人選唐詩」(1) P 二五六七(附P 二五五二)、「唐人選唐詩」(2) P 二五五五、「唐人選唐詩」(3) P 三六一九、「唐人選唐詩」(4) P 三九六七、「唐人選唐詩」(5) P 五〇〇七、「唐人選唐詩」(6) S 〇五五五、「李矯雜詠詩」(二点)、「高適詩集」(二点)、「王梵志詩集」(二七点)、「白香山詩集」、「心海集」(佚名)、「涉道詩」(李翔撰)、「古賢集」(佚名詠史長編詩、三点)、「秦婦吟」(韋莊撰、八点)

【挙例】

〔図版1〕第一首、(録文は校勘を経たものを掲げる。以下同)

(李白) 江上之山藏秋作

漁霞臥舊壑、散髮謝遠遊。山蟬號枯桑、始復知天秋。朔鴻別海裔、越燕辭江樓。颯颯風卷沙、茫茫霧縈洲。黃雲結

暮色、白水楊寒流。感激心自傷、浹淚難收。蘅蘭方蕭瑟、長歎令人愁。<sup>(2)</sup>

図版1はいわゆる〔唐人選唐詩〕であるが、詩題、作者名、一篇あるいは一首ごとに段落を分けているのが認められる。このほかに、段落の分けてない全くのベタや、一篇ごとに空格を設けているものなどがある。書写形式に若干の異同があるが、本文の部分はいずれも不分段である、というのが詩文類写本に共通する特徴である。

この特徴は敦煌以外の、例えば日本に将来された韻文写本とも形式を一にしており、敦煌写本独自の現象ではない。また、時代が降って刊本が登場しても、版式は不分段が主流であるから、漢文古代文献においてはきわめて一般的な形式と言えよう。詩文類が不分段というのは正しく漢民族の伝統文化を反映しており、敦煌という辺境の一地方都市においても例外ではないのである。

Ⅳ 俗曲類。敦煌文学では一般に曲子詞と称されるが、曲子詞より広い範囲を対象とするので、より普遍的な名称である俗曲を用いた。調査対象は『歌辞総編』収録のスタイン、ペリオ本である。本書は校勘をはじめとして、種々の点で問題を存するが、現時点では、最も多数の作品を収録していること、曲牌の欠落している作品について考証を行って曲名を比定していることによって、暫時利用することにする。内容の類別として、宗教と世俗の二分類、形式面では、齊言体と雜言体の区別を設定した。この分類を設けたのは、分段、不分段の対立が、内容においては宗教と世俗、形式においては齊言と雜言の差異によって生じたのではないかという推論に基づくためである。宗教類とは、偈頌、讚文、願文、呪文などの宗教韻文に、俗曲を援用したものを中心として、比較的宗教色の濃い作品を指す。世俗類は逆に宗教色の薄い作品である。また、不分段はまったくのベタ、白文のほかに、句読が切つてあったり、一首毎あるいは篇に分

つて読みやすくする工夫がなされているものが見出された。この現象についての考察は今後の課題として残すが、とりあえず別項に帰納した。

①分段

(甲) 宗教類

(イ) 齊言体

〔化生子〕 P 二二二二、〔皇帝感〕 P 二七二二、〔百歳篇〕 P 二八四七、〔五更転〕 P 二九六三、〔失調名〕 P 三二二〇、〔化生子〕 P 三三二〇、〔長安辞〕 P 三六四四(二篇)、〔百歳篇〕 P 三八二二、〔失調名〕 P 四五九七、〔十空讚〕 P 四六〇八、〔失調名〕 P 四六二五、〔十種縁〕 S 〇二二六、〔証無為〕 S 〇二二六、〔十種縁〕 S 二二〇四、〔十無常〕 S 二二〇四、〔十二時〕 S 二六七九、〔失調名〕 S 四〇三九、〔失調名〕 S 五四七三、〔失調名〕 S 五五三九、〔十空讚〕 S 五五三九、〔長安辞〕 S 五五四〇

(ロ) 雑言体

〔十二時〕 P 二〇五四、〔出家楽〕 P 二〇六六、〔婦去来〕 P 二〇六六、〔三冬門〕 P 二一〇七、〔千門化〕 P 二一〇七、〔婦去来〕 P 二二五〇、〔驅催老〕 P 二二〇五、〔無常取〕 P 二二〇五、〔愚痴意〕 P 二二〇五、〔為大患〕 P 二二〇五、〔無厭足〕 P 二二〇五、〔先祇備〕 P 二二〇五、〔抛暗号〕 P 二二〇五、〔無如匹〕 P 二二一九、〔失調名〕 S 二四一八(四篇)、〔五更転〕 P 二四八三、〔十二時〕 P 二七一四、〔五更転〕 P 三〇六一、〔五更転〕 P 三〇八七、〔十二時〕 P 三二八六、〔婦去来〕 P 三三七三、〔十二時〕 P 三六〇四、〔十種縁〕 S 〇二二六、〔証無為〕 S

〇二二六、〔十無常〕S〇二二六、〔失調名〕S一四九七、〔望月婆羅門〕S一五八九、〔蘇莫遮〕S二〇八〇、〔証道歌〕S二二六五、〔十無常〕S二二〇四、〔蘇莫遮〕S二九八五、〔蘇莫遮〕S四〇二二、〔十恩德〕S四四三八、〔取性遊〕S五六九二、〔最上乘〕S五六九二、〔取性遊〕S五六九二、〔失調名〕S六六三一、〔五更轉〕S六六三二、〔望月婆羅門〕S四五七八、〔三冬雪〕S五五七二

(乙) 世俗類

(イ) 齊言体

〔百歲篇〕S一〇三〇、〔皇帝感〕S五七八〇(二篇)

(ロ) 雜言体

〔菩薩蛮〕P三三三三三、〔山僧歌〕S五六九二

② 不分段

(甲) 宗教類

(イ) 齊言体

〔十空讚〕P三二二四、〔証無為〕S一五二三、〔失調名〕S一九四七、〔易易歌〕S三〇一六、〔失調名〕S四四九二〔五台山讚〕、〔失調名〕S五四五六〔五台山讚〕、〔失調名〕S五四八七〔五台山讚〕

(ロ) 雜言体

〔悉曇頌〕P二二〇四、〔悉曇頌〕P二二二二、〔十二時〕P二六三三、〔高興歌〕P二六三三、〔望月婆羅門〕P



二七〇二、「十二時」P二七三四、「悉曇頌」P三〇九九、「十二時」P三一三三、「十二時」P三一五六、「失調名」P三二四一、「謁金門」P三三三三、「証道歌」P三三六〇、「失調名」P三四〇九、「行路難」P三四〇九、「十恩德」P三四一一、「十二時」P三八二一、「蘇莫遮」S〇四六七、「失調名」S一〇七三、「証無為」S二二〇四、「撥禪闕」S二二〇四、「十二時」S二六七九、「五更轉」S二六七九（二篇）、「失調名」S四〇三七（二篇）、「無相珠」S四二四三、「三歸依」S四三〇〇、「三歸依」S四五〇八、「五更轉」S四六五四（二篇）、「失調名」S四六六二、「失調名」S五四五七、「失調名」S五五五七、「十二時」S五五六七（三篇）、「求因果」S五五八八（六篇）、「十恩德」S五六八七、「失調名」S五九七七、「五更轉」S六〇七七、「五更轉」S六〇八三（二篇）、「十恩德」S六二七四

(乙) 世俗類

(イ) 齊言体

「失調名」P二五五五（岑参『冀国夫人歌辞』）、「破陣樂」P三六一九、「失調名」P三七〇二、「十二月」P三八一一、「百歲篇」P三八一一（三篇）、「水鼓子」S六一七一

(ロ) 雜言体

『雲謠集』S一一四一・P二八三八、「臨仙子」P二五〇六、「春光好」P二五〇六、「酒泉子」P二五〇六、「獻忠心」P二五〇六、「杖前飛」P二五四四、「高興歌」P二五四四、「高興歌」P二五五五（五七言情詞）、「十二時」P二五六四、「定西藩」P二六四一、「越思人」P二七四八（二篇）、「怨春闈」P二七四八、「望江南」P二八〇九（四篇）、「酒泉子」P二八〇九、「楊柳子」P二八〇九、「擣練子」P二八〇九、「五更轉」P二九七六、「定風波」

P三〇九三、「長夜雨」P三二二二二（一篇）、「浣溪沙」P三二二八（六篇）、「菩薩蛮」P三二二八（二篇）、「望江南」P三二二八（四篇）、「感皇恩」P三二二八、「臨江仙」P三二三七、「南歌子」P三二三七、「擣練子」P三三一九、「失調名」P三三六〇、「蘇莫遮」P三三六〇、「失調名」P三六一九、「失調名」P三七〇六、「擣練子」P三七一八、「失調名」P三八一一、「高興歌」P三八一一、「胡笳十八拍又一拍」P三八一一、「生查子」P三八一一（二篇）、「謁金門」P三八二二（一篇）、「蘇莫遮」P三八二二、「定風波」P三八二二、「感皇恩」P三八二二、「十二時」P三八二二（四篇）、「南歌子」P三八三六（四篇）、「望江南」P三九一一（四篇）、「失調名」P三九一一、「擣練子」P三九一一、「鵲踏枝」P四〇一七、「長相思」P四〇一七、「浣溪沙」P四六九二、「望遠行」P四六九二、「高興歌」P四九九三、「木蘭歌」S〇三二九、「失調名」S〇三二九（三篇）、「失調名」S一〇四〇、「五更軼」S一四九七、「失調名」S二二〇四、「別仙子」S四三三二、「菩薩蛮」S四三三二、「酒泉子」S四三三二、「謁金門」S四三五九、「失調名」S四五〇八、「山花子」S五五四〇

③不分段（2）（分篇、分首、句讀等の認められるもの）

（甲）宗教類

（イ）齊言体

〔十偈辭〕P二六〇三、「孝順樂」P二八四三、「五更軼」P二九八四、「百歲篇」S二九四七、「五更軼」S三〇一七、「五更軼」S四一七三、「百歲篇」S五五四九、「五更軼」S五九九六、「失調名」S六九二三

（ロ）雜言体

〔五更軼〕P二二七〇、〔十二時〕P二八一三、〔十恩德〕P二八四三、〔十二時〕P二九一八、〔十二時〕P二九四三、〔失調名〕P二九五三（二篇）、〔証無果〕P三〇六五、〔五更軼〕P三〇六五、〔悉曇頌〕P三〇八二、〔五更軼兼十二時〕P三一四一、〔十恩德〕S〇二八九、〔十二時〕S〇四二七、〔五更軼兼十二時〕S二四五四、〔失調名〕S三〇一七、〔行路難〕S三〇一七、〔失調名〕S四二七七（五七言禪詩）、S四二七七、〔失調名〕S四三〇一、〔五更軼〕S四六三四、〔十恩德〕S五五六四、〔十恩德〕S五五九一、〔十恩德〕S五六〇一、〔証道歌〕S六〇〇〇、〔行路難〕S六〇四二、〔失調名〕S六九二三、〔五更軼〕S六九二三

(乙) 世俗類

(イ) 齊言体

〔百歲篇〕P三一六八、〔泛龍船〕P三二七一、〔樂世辭〕P三二七一、〔水調辭〕P三二七一、〔何滿子辭〕P三二七一、〔歌樂還鄉〕S〇二八九、〔失調名〕S〇二八九、〔皇帝感〕S〇二八九（二篇）、〔百歲篇〕S二九四七（二篇）、〔百歲篇〕S五五四九（二篇）、〔十二月〕S六二〇八、〔泛龍船〕S六五三七、〔樂世辭〕S六五三七、〔水調辭〕S六五三七（二篇）、〔何滿子辭〕S六五三七、〔劍器辭〕S六五三七

(ロ) 雜言体

〔十二時〕P二九五二（二篇）、〔菩薩蛮〕P三二五一（四篇）、〔雲謡集〕P三二五一、〔水調辭〕P三二七一、〔鄭郎子辭〕P三二七一、〔樂世辭〕P三二七一、〔阿曹婆辭〕P三二七一、〔闕百草辭〕P三二七一、〔百歲篇〕P三三六一（二篇）、〔南歌子〕P三八三六、〔更漏長〕P三九九四、〔更漏子〕P三九九四、〔菩薩蛮〕P三九九四（二篇）、〔虞美人〕P三九九四、〔百歲篇〕S一五八八（二篇）、〔杖前飛〕S二〇四九、〔高興歌〕S二〇四九、〔五更

転兼十二時」S二四五四、〔擣衣声〕S二六〇七、〔宮怨春〕S二六〇七、〔再相逢〕S二六〇七、〔臨江仙〕S二六〇七（二篇）、〔浣溪沙〕S二六〇七（四篇）、〔菩薩蛮〕S二六〇七（五篇）、〔失調名〕S二六〇七（六篇）、〔贊普子〕S二六〇七、〔獻忠心〕S二六〇七（二篇）、〔西江月〕S二六〇七、〔十二時〕S四二二九、〔望江南〕S五五六（三篇）、〔定乾坤〕S五六四三（二篇）、〔送征衣〕S五六四三、〔紅娘子〕S五六四三、〔失調名〕S五八五二、〔鄭郎子辞〕S六五三七、〔樂世辞〕S六五三七、〔阿曹婆辞〕S六五三七、〔鬪百草辞〕S六五三七

【举例】

〔凶版2〕二行めより

〔化生子〕（化生子讚） 第二首、第三首<sup>(3)</sup>

化生童子拂金床、天雨花動地香、

更有諸方共獻果、委花<sup>(4)</sup>樾被鳥銜將。

化生童子食天厨、百味馨香各自殊、

無限天人持寶器、瑠璃鉢飯似眞珠。

凶版2は、宗教類・齊言体に属するが、書写形態は七言二段である。

〔凶版3〕 第一首

〔云謡集雜曲子〕〔思歸雲〕〔闌怨<sup>(5)</sup>〕

征夫數載、萍寄他邦。去便無消息、累換星霜。月下愁聽砧杵、擬塞雁行。孤眠鸞帳裏、枉勞魂夢、夜夜飛颺。想君

薄行、更不思量。誰爲傳書与、表妾哀腸。倚牖無言垂血淚、闍祝三光。万般無那處、一爐香盡、又更添香。

図版3は、長短句集『雲謡集』の開端部分である。『雲謡集』は、周知のように宗教色の薄い作品が収められているが、いずれの写本も不分段である。

上の結果について、若干の出入はあるが、表に示すと次のようである。

		宗教類	世俗類
齊言体	分段	不分段	
雑言体	不分段		

形式について、齊言体には宗教と世俗の違いによる書写形態の区別がはっきり現れている。雑言体には、宗教、世俗ともに不分段が見られるが、宗教類には、分段写本もかなり多く見出すことができる。内容面では、宗教類には分段、不分段ともに認められるが、齊言体には不分段が認められない。世俗類はほとんどが不分段で、分段がきわめて少ないという傾向が現れている。

この特徴を前項の詩文類に対照してみると、齊言体の俗曲が不分段というのは、齊言体が多数を占める詩文類と共通するので、納得の行くところであるが、雑言体も不分段であるのは興が深い。一般に中国文学では、雅と俗、すなわち士大夫、知識人層によって創作される文学と、庶民、民衆層によって支持される俗文学という対立構造で把握される。

先に述べたように雅を代表する詩文類が不分段というのは正しく士大夫文化の伝統の反映といえる。ところが俗曲と称することに象徴されるように、通俗さらには卑俗ともみなされる世俗類俗曲の写本と詩文類とが書写形態において等しい結果が認められた。同時代に創作され、享受された文芸として捉えるならば、例えば〔唐人選唐詩〕と『雲謡集』は、内容は世俗類、形式は齊雑混淆と、同じ範疇に属する。写本の書式に現れた特徴が、写し手の、また、書写に使われた藍本の形式を踏襲しているとすれば、作者の認識を反映しているとも考えられるわけで、写し手あるいは遡って作者の

意識において、この両者が近しい関係であるという認識を持っていたのではないかと推測されるであろう。この点については、後に講唱類と併せて述べることにする。

Ⅳ 講唱類。対象は『敦煌變文集』<sup>6</sup>収録の、韻文を含む作品である。従来の分類に従って、(甲) 講經文、(乙) 押座文、(丙) 變文に分け、さらにこの分類に属しない、講唱類と認め得るか疑問の存する作品について、(丁) その他、という項目を設けた。敦煌出土講唱文学に現れる韻文は、講經文、變文、押座文を問わず、若干の畸零句(破格)を除けば、七言か五言の齊言体が中心であるから、形式面の分類は特に設けていない。内容については、俗曲類の分類に照らせば、講經文、押座文が宗教類、變文は宗教世俗混合類である。

### ①分段

#### (甲) 講經文類

『長興四年中興殿応制節講經文』、『双恩記』(『敦煌變文集新書』、中国文化大学中文研究所、八四年等収録)、(『金剛般若波羅密經講經文』)、(『仏説阿弥陀經講經文』(1))、(『仏説阿弥陀經講經文』(2))、(『仏説阿弥陀經講經文』(3))、(『妙法蓮華經講經文』(1))、(『維摩詰經講經文』(2))、(『維摩詰經講經文』(3))、(『維摩詰經講經文』(4))、(『維摩詰經講經文』(5))、(『仏説觀弥勒菩薩上生兜率天經講經文』)、(『父母恩重經講經文』(1))

#### (乙) 押座文類

〔押座文〕P三二二八、『維摩詰經押座文』P三二一〇、『温室經講唱押座文』P三二一〇、『故圓鑒大師二十四孝

押座文』(二点)、『左街僧録大師座文』

(丙) 変文類

〔王昭君変文〕、〔伍子胥変文〕(四点)、〔漢将王陵変〕(四点)、〔張義潮変文〕、〔張淮深変文〕、〔提季布伝文〕(八点)、〔季布詩詠〕、〔太子成道経〕(三点)、〔太子成道変文〕、〔破魔変文〕(二点)、〔大目乾連冥間救母変文〕S二六一四、〔大目乾連冥間救母変文〕P三一〇七、〔大目乾連冥間救母変文〕P三四八五、〔大目乾連冥間救母変文〕P四九八八、〔頻婆娑羅王后官姪女功德意供養塔生天因縁変〕(二点)、〔歡喜国王縁〕、〔醜女縁起〕P二九四五、〔醜女縁起〕P三五九二、〔秋吟〕、〔不知名変文〕P三一二八、〔不知名変文〕S四三二五、〔董永変文〕

(丁) その他

〔孔子項託相問書〕P三八八三、〔无常経講経文〕<sup>(7)</sup>

② 不分段

(甲) 講経文類

〔妙法蓮華経講経文〕(2)、〔仏説阿弥陀経講経文〕(4) (句読あり)

(乙) 押座文類

〔八相押座文〕、〔維摩経押座文〕S一四四一、〔維摩経押座文〕P二二二二、〔押座文〕S四四七四

(丙) 変文類

〔降魔変文〕S四三九八、〔大目乾連冥間救母変文〕P二三一九 (節録本)、〔醜女変文〕S四五一一、〔醜女変文〕

S二二一四、『葉淨能詩』（断句あり）

（丁）その他

『廬山遠公話』、『孔子項託相問書』（九点）、『燕子賦』（1）（二点）、『燕子賦』（2）、『四獸因縁』、『百鳥名』（二点）

【挙例】

〔図版4〕中央五言句

淨土何曾遠、認得還須顯、都來咫尺間、迷心終不見、

見了只在心、心了淨方現、莫更苦尋求、只此除方便。

〔図版4〕の前半部分は〔維摩詰經講經文〕である。中央に五言句が三段、次いで七言句が二段に分段されているのが見て取れる。講經文に含まれる韻文は五言、六言、七言の齊言体が中心であるが、本写本のごとく二段ないしは三段に分段されるのが通例である。また、〔阿弥陀經講經文〕等には雜言句も含まれるが、それも分断して書かれるから、不分段は例外として見なしてよいであろう。

〔図版5〕二行目より

單于傳告報書蕃 各自排兵向北山 左邊盡着黄金甲

右半紛紜似錦團 黄羊野鳥捻槍撥 鹿鹿從頭喫箭穿

遠指白雲呼且住 聽奴一曲別鄉關 姜家官苑住秦川



南望長安路幾千 不應玉塞朝雲斷 直爲金河夜夢連

四版5は、世俗類変文に属する〔王昭君変文<sup>8</sup>〕である。七言齐言体で、三段、四段にきれいに分段されているのが見て取れる。変文類は、宗教と世俗とを問わず、この形式と二段の形式が通例である。

宗教文献に属する講經文およびそれに付随する押座文、また「目連変文」等に代表される宗教色の濃い変文に分段という傾向が現れているのは、まさに俗曲類で挙げた宗教類・齐言体の項と一致する。しかし、内容的には世俗類に属する宗教色の薄い〔王昭君変文〕や〔伍子胥変文〕などが分段という現象は注目されるところである。世俗類については、俗曲と変文は一致しないのである。

講唱文学は、葉德均「宋元明講唱文学<sup>9</sup>」によって理論体系化されて以来、韻文唱詞の形式の差異によって詩讚系と樂曲系に大別されるのが一般である。詩讚系の唱詞は齐言体、樂曲系は雜言体である。葉氏は詩讚系の起源を仏典に含まれる詩讚に求め、講唱文学としては敦煌変文を濫觴としている。それに対して樂曲系は宋代に盛行する詞を講唱に導入したものより始まるというのが、大まかな変遷過程として説かれる。この理論は講唱文学の分析に対して有効な方法論として高く評価されて来たが、筆者は従来、これに対していささか疑問点があった。まず、第一に詩讚系は敦煌講唱文学に始まるとして、その次に登場するのは元代詞話を待たねばならず、この間、宋代という空白期間が存在することになる。宋代にも詩讚系講唱の痕跡が若干認められるが、宋代講唱の主流は先述したように諸宮調や小説をはじめとする樂曲系であった。ひとつの芸能が消滅し、再度復活することはあり得るとしても、敦煌講唱と元代詞話の間には三〇〇年余りに及ぶ長い空白期間が存在しているのであるから、韻文の形式が近似しているというだけで両者を結びつけるのは、いささか根拠が薄弱ではないか。第二に、敦煌においてはすでに詞の前身である曲子詞が盛んに行われていたと思

われるが、それが講唱にまったく影響を与えていない、少なくとも現存資料による限り、影響の痕跡すら認められない。それは何故か、またどうして宋代には詞が講唱韻文の主流となったのか。

この二つの疑問点に対して、分段、不分段という書写形式の特徴は、解答を考える糸口を与えてくれるように思われる。まず、詩讀系講唱の起源に敦煌講唱を位置づける点について、敦煌講唱写本は分段という特徴がきわめて顕著であるが、これは敦煌のみならず、写本と刊本とを問わず、のちの詩讀系文学全般に共通する特徴である。いま、詳述する暇はないが、時代が下って南宋の『大唐三藏取経詩話』や元明詞話をはじめ、宝卷や明清から現代まで連なる彈詞系、鼓詞系の講唱文学は、いずれも分段である。さらに、分段という書式が、中国古代文献の中では、ほとんど詩讀系文学に独自であるという事実まで考慮すると、分段という特徴は、敦煌講唱と元明詞話を結びつける一つの有力な根拠となり得ると考えられるのである。<sup>(10)</sup>

つぎに雑言体が敦煌講唱に現れないという現象について、さきに俗曲類で少しく述べたように、分段、不分段を作者あるいは写し手の意識の反映として捉えるならば、詩文類と世俗類俗曲が等しく分段という傾向を示しているのは、両者が近い関係にあったことの表れであると推測される。そしてそれとは反対に、書写形態の異なる世俗類俗曲と講唱の間には大きな隔たりが存在しているように思われるのである。敦煌講唱に曲子詞がまったく見られないというのは、その隔たりに起因すると見てよからう。従って、詩讀系講唱と俗曲あるいは楽曲系講唱との間には、本質的な違いがあるのではないかとする葉氏の説を補強することにもなるであらう。また、分段は次の詩讀（經典）類で見るとく、仏典をはじめとする宗教文献にきわめて特徴的な形式である。この点から考えれば、敦煌講唱の源流が仏教などの外来文化にあるという説を裏付ける証拠ともなり得るのである。

ところで、不分段は「その他」に分類したものがほとんどである。先述のごとく、「その他」は『変文集』に収録されているが、その体例に著しく問題を存する作品が少なくない。<sup>(11)</sup>いま、個々の例について述べる余裕はないが、それらが変文や講經文と異なる書写形態であるのは、これらの作品が講唱ではない、少なくとも詩讀系講唱ではないことを示していると考えられる。分段、不分段の特徴は、敦煌講唱の分類、実態の解明に、一つの有力な手掛りになると言えよう。

#### Ⅳ 詩讀（經典）類<sup>(12)</sup>

(甲) 仏教類

##### ① 分段

『金光明經第二』P四五〇六、『仏説梵摩論經一卷』P二二四〇、『仏地經』P三七〇九、『諸經要集』P二二六三、

『御注金剛般若波羅密經宣演』(二・三・四)

##### ② 不分段、調査不足のため未詳

(乙) 道教類

##### ① 分段

『太上洞玄靈宝无量度人上品妙經』P二六〇六、『太玄真一本際經聖行品卷第三』P二二七〇、『无上秘要卷第二

十九』P二六〇六

##### ② 不分段、調査不足のため未詳

【孝例】

〔図版6〕『金光明經』

爲第二王子而說偈言

振動大地 及以大海 日无精光 如有覆弊

於上虚空 雨諸華香 必是我弟 捨於愛身

図版6は北魏皇興五年（四七一）という紀年の付された、敦煌写本中の紀年写本としては最古の『金光明經』であるが、「偈を説いて言う」として、四言の偈が四段に分段されて記されているのが認められる。釈道を問わず、宗教文献は二段から四段に分けて記されるのが通例である。

今回は紙幅の関係もあり、仏教および道教経典についての体系的な調査は行っていない。しかし古写経をはじめとして、一般的に宗教韻文については分段の傾向が強いという印象は否定できないであろう。敦煌写本についてもおそらく同様であって、数量こそ微々たるものに過ぎないが、上に示したごとき目睹の容易な影印資料に現れた韻文が、すべて分段であったことはその一端を語っているように思われる。

さて、先述したように、不分段は敦煌に限らず時空ともに中国古典籍の最も普遍的な書式であった。この点に照らしみると、分段は中国あるいは漢民族の伝統文化の中にあつては異質なものと見えよう。従つて、その源流は漢民族の伝統文化以外に求められると推論することができる。それはおそらく仏教であり、分段の起源は仏典にあると考えられるのである。いずれにせよ、この点をも含めて、敦煌宗教写本における韻文の書写形態については、近い将来調査を行い欠を補いたい。

最後に、敦煌写本に現れた韻文全般にわたる書写の特徴を表に示し、上の結論ないしは推論をまとめておきたい。

	齊言体						
	雑言体						
不分段	不分段	詩文(世俗)					
	不分段	俗曲(世俗)					
	分段	分段	俗曲(宗教)				
	不分段	分段		講唱(世俗)			
	分段	分段			講唱(宗教)		
						詩讚(仏教)	
							詩讚(道教)

第一に、詩文類と世俗類俗曲が不分段で等しいという特徴は、両者が近い関係にあることを推定せしむる。第二に、世俗類俗曲と講唱が書写形態を異にするのは、両者に相当の隔たりが存在することが推定される。第三に、仏典などの宗教文献と講唱、より厳密には詩讚系講唱がきわめて顕著に分段の傾向を示しているのは、詩讚系講唱は仏典に源流を求めることができるか、少なくとも仏教の強い影響下にあったと考えられる。第四に、分段不分段の分岐は宗教類・雑言体俗曲において生じているが、これは詩文に象徴される中国伝統文化と、仏典に代表される外来新興文化との対立および葛藤のきわだった表れであろうと思われる。

分段不分段という書写の特徴のみに基づいた議論は、おのずと限界のあることは言うまでもない。今後の課題としては、如上の推論を如何に検証して行くかという点にあると言えよう。

## 注

- (1) 上海古籍出版社、八七年。
- (2) 黄永武『敦煌的唐詩』(洪範書店、八六年) 八頁、参照。
- (3) 前掲『歌辞総編』一〇九九頁。また『敦煌変文集』(人民文学出版社、五七年、以下『変文集』と略称) 所収(仏説阿弥陀経講経文) 四八五頁、参照。
- (4) 『樞』は『歌辞総編』の校勘に従う。『変文集』も同。
- (5) 『歌辞総編』五八頁。潘重規『敦煌雲謡集新書』(石門出版公司、七七年) 参照。
- (6) 注(3) 参照。
- (7) 『変文集』には(『无常経講経文』)と擬題されて収められるが、最近の研究ではその体例と内容によって、本篇は一種の解座文のようなものとされている。白化文「解講和解講辞」(『俗文学論』、黒龍江人民出版社、八七年所収) 参照。
- (8) 『変文集』一〇一頁。金文京「敦煌本『王昭君変文』校注」(『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』、第二四号、九二年) 参照。
- (9) いま『戯曲小説叢考』(中華書局、五八年) 所収。
- (10) 講唱、戯曲など詩讀系文学全般については、金文京「詩讀系文学試論」(『中国—社会と文化』第七号、九二年) に詳述されている。啓発を受けた点が少なくない。なお、該論考に引かれている拙論「敦煌出土写本に現れた韻文の書写形態」は、八八年度日本中国学会大会において口頭発表した際のレジユメの標題であり、発表の題目は「敦煌本唐人選唐詩について」であった。
- (11) 金岡照光「敦煌出土文学文献分類目録附解説」(『東洋文庫、敦煌文献研究委員会、七一年』、「解説之部・散文体文献・対話体俗文類」の項(二一七頁)、および「同・韻文体文献・短編歌詠類」の項(二三四頁) 等、参照。
- (12) 対象は『敦煌書法叢刊』(二玄社、八三年) 所収のみである。







